

第 1 1 章 新秩序に向かって

1941 年 10 月 15 日午後、日本人を米国から撤退させるために日本政府から求められた日本郵船の三隻のうちの一隻である龍田丸に乗船するために、私が東京から横浜に向こうとしていた間に、近衛公爵は彼の最終結論である辞任を発表するために官邸から皇居に向かっていた。私は内閣崩壊が数日後に差し迫っていることを知っており、出発当日の朝、ヘラルド・トリビューンに電話をし、最後の記事で何が起こりつつあるかをほのめかそうとしたが、検閲官は私が内閣崩壊について述べることを許さなかった。米国との間で合意に達せず、近衛が辞任するのは明らかであったが、新内閣の性質とその政策は分かっていなかった。東京では様々な噂が広まり、その一つは、内閣は海軍によって構成され、米国に対して更に譲歩して、暫定合意とアメリカによる禁輸措置の緩和を得ようとするというものだった。もう一つは、同じ目的のために陸軍が新内閣を構成する場合の影響だった。米国にさらに譲歩することで日本が「面目」を失っている中で、過激派と国粋主義者を監視し、抑制することができるのは陸軍しかない信じられていた。私は、ナチスがソ連で悲惨で八方塞がりな段階では、軍国主義者が南方での攻撃開始はないだろうと考え、後者に傾いていた。しかし、私には日本の情報通から何が起きているかを知る機会ではなかった。それは、二日間の殆どを、大急ぎで龍田丸に乗船するために費やしたからだ。さらに、私は警察が厳しく監視され、友人からも、一度ならず、用心するよう注意されていたため、以前に比べて、これらの日本人との接触は慎重にし、会う頻度も少なくしなければならなかった。

龍田丸の出港前日の午後 10 時まで、警察は私の出国を許可すべきかの結論に至っていなかった。二日間、彼らは私の 1 か月のホノルル観光のための出発申請について議論していた。ヘラルド・トリビューンは、私に妻と会うための休暇を許可した。妻は、1 年前の国務省がアメリカ人に東洋から撤退するよう警告を発した時期に日本を出国していた。私はホノルルには約 11 日間滞在し、別の撤退用の船で、ホノルルを 11 月 4 日に出港する予定の大洋丸に乗船して 1 か月後に戻ってくると説明した。警察は未だに出港に関する義務的な許可を発行しなかった。最終的には、外交機関、情報局と官制報道機関である同盟通信社にいる多くの忠実な友人からの強い要請によって、私は出国が許された。

私の荷物は旅行に必要な衣服を入れたスーツケース 2 個だけで、それ以外は残してきた。それは、日本は春までは攻撃開始しないと信じていたからだ。出航前に、大蔵省の職員が日本からお金を国外に持ち出すには公式な認可が必要だと説明して、私が旅行中のチップと出費のために持っていた 140 円（約 35 ドル）を取り上げ、10 円（3 ドル以下）を返し、彼らはこれだけあれば十分だろうと言った。日本政府は、米国による資産凍結の仕返しにアメリカ資産凍結を行い、米国と互恵的な対応を行うと公式声明した。米国が日本人に認可なしで約 200 ドルを持って出国することを許可したのに対して、日本はアメリカ人の出国で認可されたのは 3 ドル以下だった。これは米国と日本のそれぞれの対応を示すには素晴らしい、最後の私の個人的な実例となった。

ホノルルへの航海は、アメリカ領海に行く前に横浜に引き返すかもしれないという不確実性のため、乗客の間では不安が渦巻いていた。アメリカ生まれの日本人の中には浅間丸に乗船して日本を出発後、単に三週間後に戻ってくるという不運な経験をしていた者が少なからずいた。これは、7月のアメリカ政府による日本の財産凍結によって、ホノルル発アメリカ着の予定だった浅間丸は日本に引き返すよう指示されたからだった。その乗船者の話によると、東京からのサンフランシスコに行くかそれとも引き返すかの最終的指令を待つために、国際日付変更線を8回横断したという。日没後、我々には進路を知ることが出来ず、夜中は引き返しているという噂が広がっていたが、朝、太陽が我々は変わらず東を向いていることを示し、噂は無くなった。船はその時点での日本とアメリカ間の関係に反映する、「準戦時」指示下で航行していた。指示された船の進路は隠され、付近にいるかもしれない「準敵」船に位置を知らせないために、船からの無線の発信は禁止された。ホノルルへの入港時には、アメリカ空軍と海軍力の控え目な誇示によって歓迎され、飛行機が日本の来客船を旋回し、周りを魚雷艇がビューと高速で過ぎ去った。撤退船の入港と出港は、それ以外は平穩無事だった。

ホノルルの海上で、近衛陣営では軍事大臣だった東条大将によって新内閣が組織されたことを報道で知った。新内閣の声明は不吉に聞こえたが、米国との交渉は継続されると発表しており、新たな陸軍内閣は一時的休戦のために何らかの譲歩を提示するという元々の想定が変わる十分な理由はまだなかった。最初の、以前よりも危険が近づいているという兆しは、ニューヨークのヘラルド・トリビューンの編集主幹のジョージ・コーニッシュからの電報での、私への日本には戻るなという指示だった。彼は私の新聞仲間が逮捕され、警察は私が帰国するのを待っていることを示す報告を受けていた。太平洋戦争後、私が日本での投獄や拘留されなかったのは友人のお陰であり、ありがたく思っている。

ニューヨークからの電報を受けたのは11月の第一週の大洋丸がホノルルを出港する日の二日前で、私は既に日本に戻るための準備を終わりにしていた。私は日本人の職員と新聞社の同僚のために衣服と食料品を購入していた。在ホノルル日本帝国総領事館の総領事である喜多（**喜多長雄）が東京の外務省から私の日本帰国の認可を受けていた。喜多は、後に、重要な軍事情報を電話で東京に送信したことでFBIから告訴されることになった。彼は、私との会話では、将来に対して、特に悲観的に考えているようには見えなかったが、戦争が起こるかの瀬戸際になっていると感じていたかもしれない。私が彼に日本には戻らないよう指示されていると伝えたと、彼は困惑している様子で、それが今後、起こりうる兆候を示しているかもしれないと心配しているように見えた。彼はその後、東京の外務省に電報で私が東京には戻らないことを伝えたことを教えてくれた。私には、彼はなぜこうしたのかは未だに分からない。それは単なる流れ作業なのかもしれないが、ホノルルへの攻撃後、私が感じたのは、その後の日本の行動をうすうす感じているアメリカ人が増えていることを示唆するものとして送られたのでないかということだった。しかし、もし後者だったら、必要でない

のに喜多が私に教えてくれた理由が分からない。

後に、喜多は私のために、非常に快活な「穏健派」の日本人である来栖三郎とのインタビューを手配してくれた。ホノルルは、彼が、米国との最後の「交渉」のために、帆船でワシントンに行く途中で寄港したのだ。彼が宿泊するロイヤル・ハワイアン・ホテルで、30 分の会話が合った。彼は東条内閣が戦時内閣であることを否定し、東条は「扇動者」ではなく、真摯に米国との合意を得ようと努力していると述べた。軍国主義者は既に民主主義諸国を攻撃することを最終的に決定していたが、このことを来栖が知っていたかについては疑問の余地がある。ベルリンで駐独日本大使として三国同盟に署名しながら、「穏健派」外交官とされている男は、もし、軍国主義者の計画における彼の役割を前もって知られていなかったのなら、12 月 7 日の攻撃のために米国を油断させる外交的なおとりの役目をもっと上手に、そして誠実に果たすことが出来ただろう。さらに、軍国主義者は外務省の非軍部の当局者には彼らの秘密計画については殆ど知らせなかった。外務省は軍国主義者の表向きとして利用され、その裏では軍国主義者が国際的な犯罪を行っていた。来栖は野村、その特別補佐である若杉要や他の数えきれない日本政府高官たちと同様、皆が、運命論を強く持ち、大惨事が近づいていることを感じながらも、軍部の指導者たちからの最大な被害者だったのかもしれない。龍田丸がホノルル攻撃の 2, 3 日前に、米国への「二つ目の待避旅行」としてホノルルを出発し、その後引き返すことになったが、この船長は彼の船が、その前の私が乗船した時も攻撃がなかったように、少なくとも、米国から日本に戻るまでは攻撃はないだろうとアメリカ人に思い込ませるためのおとり船として使われていることを知らされていたかについても疑問の余地がある。

11 月 5 日出港の大洋丸は、財産凍結強化の指令で、アメリカ当局者からの日本人への検査が追加され、予定よりも一日延期され、少し悲しげだった。この船はホノルルから日本に直接帰港した、平時にアメリカ海域を去った最後の日本船となった。貨物はなく、ホノルルからの荷物も郵便物を載せることも許されず、財産凍結下でこれらの検査に必要な時間を、この船は埠頭の水面上に危険と隣り合わせの状態で作泊し、市の中心部の主要な街並みをまっすぐ見上げていた。この街並みに日本の戦艦と爆撃機が 1 か月後に攻撃のために戻って来るようになった。船には 456 人の乗客がいて、そのうち白人は 3 人しかいなかった。その 3 人は、日本では最高の外国人ピアニストであるレオ・シロタ、彼の妻と、友人で私がこの年の初めに会ったトム・クリクトンだった。後に知ったことだが、少なくとも一人のハワイ生まれの日本人が、米国陸軍の指揮官から休暇の許可をもらい、両親が船で出航するのを見送りにやって来ていた。その後、彼は両親の本土への攻撃のための訓練に戻るようになった。戦争の勃発がアメリカ生まれの日本人二世ほど悲劇を引き起こしたことはなかった。ほとんどの場合、アメリカ生まれの日本人は彼らが生まれた国に対して忠実であることを私は個人的に知っていた。しかし、いくつかの事例では、異邦人である父母によって盲目的な忠誠心、服従と他の日本の伝統がアメリカ生まれの日本人の性格に染みついていることがあること

を聞いたことがある。

大洋丸の出航後、日本の次の行動は何なのかを考えながら、ホノルルで1か月を費やした。その間、ヘラルド・トリビューンへの一連の記事を書くために陸軍と海軍を訪れた。私が取材した海軍将校たちは日本の太平洋への攻撃には非常に神経質のようだったが、真珠湾への攻撃の可能性については概して、最小限に考えていた。何よりも私を驚かせたのは、真珠湾が公開されていることだった。数セントでホノルル市街からバスに乗って、巨大基地を通り、湾で現在行われていること全てを見ることが出来た。あるアメリカ海軍将校は真珠湾がさらされている危険性について認め、湾が見渡せる丘に、既に日本人が住んだり、ガソリンスタンドを経営していたりしていることを指摘した。日本人は既に、法を犯すことなく、アメリカ艦隊の行動を監視することが出来た。彼らは良好な場所から昼間に広範囲を常に簡単に見ながら、湾にいる軍艦の数と種類を知ることが出来た。同様な状況は日本では聞いたことがなかった。外国人はいかなる海軍基地にも近づくことは出来なかった。それは警察に止められ、或いは逮捕されるからだ。私が東京を去る前に、動員令で部隊の移動があったが、その時は、中国から日本船に乗ってやって来た外国人は、通常の埠頭からの上陸は許されず、岸から離れた別の浅瀬に揚げられ、連絡船で上陸させられた。長崎では岸に固定されている竹竿に結び付けた細長い布で遮ることで輸送船の移動を隠していた。

12月5日午後12時30分、私と妻がニューヨークに帰港するルーライン号に乗船してホノルルを出航した。この豪華客船は行楽客と、アメリカでクリスマスを過ごすホノルル居住者で混雑していた。我々はいつものアロハの飾りリボンとハワイアン音楽の見送りを受けた。我々が港を出る時には陸軍の爆撃機と迫撃機が精緻な実演を催した。この飛行機が我々の大型船に向かって急降下し、ワクワクするほど近くを、息をのむようなスピードで通り過ぎた。12月7日、日曜日午前10時ごろ、客室係が私の客室をノックした。彼は私が関心を持つであろう話を持っていた。「ジャップが、今、真珠湾を爆撃した。」私は、最初はジョークだと思った。このニュースを初めて聞いた他の何百人のアメリカ人もそう思ったに違いない。それから乗務員責任者がこの話を裏付け、この話が、恐ろしい海上の炎のように、船を通り過ぎた。

正午に船員は窓と舷窓を遮光し始めた。午後5時に船長が全員の乗客を集め、出来事を知らせた。彼は、我々には日本の潜水艦か軍艦に攻撃される危険性がある事を指摘し、全員にライフジャケットを着ながら眠るか、手元に置くように指示した。彼は船が安全にサンフランシスコまで運行できることを願っているとの不吉な発言で結んだ。船長は我々以上に重大な危険性について自覚していた。我々の船は輝く白色で塗られ、このことで夜中に、自分自身が簡単に、敵に見つけられる恐れがあった。さらに、日本はほんの1日半前に我々がホノルルを出発したことを知っており、少し考えれば我々の位置を知ることができた。日本が我々の大型船を拿捕したがつていることは、容易に予想できた。この船は太平洋の定期客船のうち最高の豪華船の一つで、拿捕すれば大きな戦利品となったであろう。それから2、3

日後の真夜中にゴールデンゲートブリッジのライトが見えた時、乗客と船員からの喜びと安堵の叫び声が上がった。しかし、ライトの点灯は長くは続かなかった。すぐに、サンフランシスコの汽笛が甲高くなり、米国は歴史上初めての灯火管制を行っていた。我々はすでに戦争中の国家に入国していた。港にはすでに機雷が仕掛けられており、海軍の小船が我々を安全な水路に誘導してくれた。後に、私は船長が航行中に怯えていた理由を知った。貨物船のシンシア・オールセン号が我々の船から 100 マイルの距離で、日本から雷撃され、彼は、シンシア・オールセン号が助けを求める SOS を受信していたのだ。潜水艦は我々とサンフランシスコ間に居て、我々が安全に港に到着できたのは思いがけない幸運だった。

民主主義諸国への攻撃について、日本の軍国主義者は 7 月 2 日 (**1941 年) の御前会議に基づく拡大計画令を見直した。7 月 2 日の時点では、インドシナ占領した後にソ連に反旗を翻し、それから、フランス植民地に新た建設された基地から南方への拡大を再開することが確実だと考えられていた。この計画はドイツが少なくとも 7 月中には、ボルガ川に侵攻すると言う仮説に基づいていた。しかし、ナチスの計画実行が失敗に終わったことが、駐ベルリン日本大使から東京に伝えられ、軍国主義者の構想は行き詰った。その間に、彼らはインドシナを占拠したことで大騒ぎになっていたことを知った。それは、民主主義諸国が極東で急激に武装し始めたのだ。

ソ連への攻撃は素早く終了すると思っていた。日本はシベリアで全面的な戦闘はしたくはなかった。ソ連極東軍は、確実に進撃しているナチス軍と対戦するために、撤退されることで弱体化し、また、スターリン政府が敗北したことで、士気が下がり、簡単に日本軍隊の餌食になると軍国主義者は考えていた。そして、白ロシアの傀儡に付き添われ、反革命運動を組織し新政府を設立することになると考えていた。この攻撃の名目は、ナチスの侵略の結果、ソ連が無秩序に陥っており、日本がシベリアに新たな「秩序」を設立しなければならないというものだった。しかし、真の理由は、ナチスが日本の傀儡政権を含む全ソ連を支配する前に、領土を掌握する必要がある、また、米国がソ連亡命政権をサポートすれば、ソ連は、米国がウラジオストクや他の東京に爆撃を投下できる基地を建てることを喜んで許可することとなり、これを阻止したかったからだと考えられる。日本がアメリカの貨物がウラジオストクに提供されることを強く反対したのは、それがソビエトのパイロットだけでなく、アメリカのパイロットにも使用されることを怖れていたためであった。

ソ連政府と赤軍がナチスとの衝突に持ちこたえたことで、日本の軍国主義者はウラジオストクへの攻撃を見送らなければならなくなり、彼らは拡張計画を、より重要な、南方への進行に変えた。軍国主義者は 1941 年春の攻撃計画を変更した—すなわち、1941 年春の攻撃計画ではインドシナでの基地が発展できるまで待機することになっていたが、それを台湾、海南省と中国の基地から直接、シンガポールとオランダ領インドへの攻撃を開始することにした。その変更理由は、北部でソ連を攻撃中に、後方に対して防御する必要があると考えたからである。インドシナとタイを 1941 年春に占領する予定だったが、当時、どちらも攻

撃にとっては必須ではなかった。晩夏から初秋までに、ナチスがソ連を攻撃した後に、日本がソ連を攻撃する予定だったが、民主主義諸国が極東における軍事的状況を強化しており、もし、天皇の軍部がフランスの植民地を完全に占領することができなければ、それによってド・ゴールの自由フランス軍のショーを演出させることになるのではないかと日本は恐れていた。さらに、日本は、ソ連の極東陸軍を破った後に、1942年春までに南方への侵攻の再開する予定だったが、その場合、南太平洋での民主主義諸国の立場は以前よりもさらに強化されていることが考えられ、従って、異なった戦法が必要であり、インドシナに新たな先進的な基地を建てるのが極めて重要になる。

私が日本を去った10月15日までに、近衛はナチスがボルガ川に到達は、いかなる場合も、それは現時点ではないことを悟っていたに違いない。軍国主義者もナチスがソ連を倒せないかもしれないと考えており、同じように認識していたに違いない。真珠湾攻撃後に国務省が公開した米日政府間の公文書からわかるように、アメリカ政府が野村からの中国での業務協定の提案を拒否したが、その理由としては日本の軍国主義者が中国の軍隊撤退を拒否しただけでも十分だった。日本からの最終的な公文書から、ソ連への勃発後に軍国主義者が欲しかったのは米国からの極東では軍部状況を強化しない誓約と貿易再開の協定だけだったことが明らかになった。言い換えれば、日本が欲しかったのは、米国が日本に材料供給を継続することで、日本は南太平洋領域での軍部の地位を維持し、その材料から軍需品生産を拡大し、後に南方での攻撃に使用できるようにすることだった。アメリカ政府はこのような隠しきれない計画の被害者になるほど馬鹿ではなく、他の民主主義諸国と共に極東での軍事力の増強を続けた。今や、民主主義諸国の状況が急激に強化され、日本はさらに待ち続ければ南太平洋での軍事バランスで揺り動かされることを自覚していたことは明らかだった。同時に、民主主義諸国からの禁輸措置による経済的圧力が国家をさらに弱体化した。軍国主義者がこのままで何もしなければ、結果として軍需工場は事実上稼働しなくなり、経済的崩壊に陥る。したがって、軍国主義者は、民主主義諸国の南太平洋領域での軍事強化が行われる前に、そして、南太平洋での原材料が確保されていることのみで、維持されている日本の軍需工場が崩壊される前に、攻撃する必要があった。米国との禁輸措置が中断され、ドイツが最終的にソ連を圧倒することに成功するまで日本が乗り切ると思っていたが、ナチスはロシアに敗北し、米国との経済休戦の締結にも失敗したことで近衛は辞任することになった。

これは、最初に近衛から、その後総理になった東条からの休戦の提案をアメリカ政府が拒否した後に起こったことをかなり、合理的に再現させたものだ。しかしながら、日本がアメリカからの条項を拒否した理由の説明にはなっていない。その説明については、すでに、本書の前半で述べた。日本大使の野村海軍大將からアメリカ国務長官のハル氏に真珠湾攻撃後に渡された最後の覚書を、「八紘一宇」すなわち「世界の八隅を一つの屋根の下に」の概念を前もって知らずに、どうやって理解できるのか私にはわからない。その日本の覚書には以下の通り、ありのままに声明している。

「東アジアの安定を確保し、世界の平和に寄与し、ことによって万国がそれぞれに応じた場所を得るようにするのが帝国日本の不変な政策である。(東亜ノ安定ヲ確保シ世界ノ平和ニ寄与シ以テ萬邦ヲシテ各其ノ所ヲ得シメントスルハ帝国不動ノ国是ナリ)」(**帝国政府ノ対米通牒覚書 1941 年 12 月 6 日)

(** <https://www.jacar.archives.go.jp/das/image-j/B02030734700>

<https://www.jacar.archives.go.jp/das/meta/B02030734700>)

この声明の殆どは 1941 年夏に東京で出版された侍のバイブル(「臣民の道」)から引用されている。これは、神武天皇の理想、或いは戒律から出ており、これに基づいて、軍国主義者は彼らが持っているのは世界を征服するための神聖の使命だと信じている。日本人にとって、国々が「それぞれに応じた場所を得」なければならないという考えは、国々は、天の子孫である天皇が統治する世界に、彼らの神の意志に応じながら、合わせなければならないということの意味する。つまり、大東亜「共栄圏」はアジアに限らず、世界の全大陸の八隅まで拡大し、国々はこの大東亜「共栄圏」に参加しなければならないということだ。

これが日本の軍国主義者が米国からの、いわゆる多边的不可侵条約と日本の占領地域からの撤兵の提案を聞き入れられない理由である。これらの提案を受け入れると日本は神聖の使命である世界征服を放棄しなければならないことになる。さらに、それ以上に、日本の一般市民に対して降伏することも意味し、これは国家の革命に等しい。日本からの「経済休戦」は最初は岩畔大佐によって東京で提案され、その後 1941 年 2 月 25 日にニューヨークのヘラルド・トリビューンに報道されたが、アメリカ政府がこれを拒否したことで、日本の軍国主義者には日本の一般市民に降伏するか、それとも、彼らの要求を拒否して、国家を破壊するかの二択しかなくなった。アメリカ外交(イギリス外交は言うまでもなく)に唯一重大なミスがあったとすれば、日本の軍閥は、かなり前から、自主的に降伏するつもりは全くなかったことを認識できていなかったことである。アメリカ外交は我々の世代だけではなく、前の世代でも同様、日本には「穏健派」が存在しており、民主主義諸国は彼らと平和に関係を持ち、誰もが理解できる言語で話し合うことが出来るという不幸な幻想の中で努力してきた。一時期、日本でも「穏健派」あるいは「リベラル」な意見が芽生え、民主主義政府に発展するかのように見えた。しかし、その芽は軍国主義者によって取り除かれた。それにもかかわらず、アメリカは「穏健派」と呼ばれる少数派がいつか、魔法のように、軍国主義者を転覆して、国家を支配すると信じることに固執した。

同様に不幸だったのは彼らが財閥を「穏健派」と混同し、前者は民主主義と平和の立場であり、国家主義と戦争には反対していると信じていたことである。初期の日本の歴史はもちろ

ん、最近の歴史は、このような考えが偽ったまま書かれており、日本語でも外国語の書籍でも、出来事について記載された本の殆どは、それを読んでも読者は何か疑問と感じて立ち止まり、真剣に考えることはない。実際の出来事は「穏健派」の三井、三菱、住友と他の日本の財閥は、民主主義諸国と戦っている日本の軍閥のために、軍需産業を稼働することで、陸軍と海軍が開始した戦争に別の方法で参加しているのである。

アメリカが財閥について間違っていたように、同じように「穏健派」と思われていた、日本の海軍についても同様に間違っていた。日本の海軍は当初から、日本陸軍よりも表面上は西洋文化に詳しいとされていたが、根底には同僚の陸軍に宿っている侍精神を感じる鼓動があった。たとえ、野村海軍大将であっても、彼が恐らく実際に「穏健派」であり、私は彼が友好的で優しいことで、彼に非常に好印象を持ったとしても、民主主義諸国への攻撃が適切な状況下にあると信じれば、間違いなく、勝利を誓い、それを支援することになるだろう。

アメリカは日本の海軍と財閥の本質を理解することに失敗したことで、海軍と陸軍が根本的に別々であるという間違った結論に至った。これはむしろ希望的観測だった。陸海軍では攻撃すべき時期と地域についての見解は異なっていたが、商人と軍国主義者が同盟して 1867 年に幕政を転覆し、互いの役割を果たすことで新たな独裁政権を設立して以来、基本的政策である征服については一致している。

多くの人々が、再び希望的観測に陥り、枢軸国と同盟したかったのは陸軍のみで、海軍は反対していたと信じた。1939 年に海軍が枢軸国との同盟に反対したのは事実だが、その拒否した理由は同盟に原則的に反対したのではなく、当時はまだ、ヨーロッパでの戦争は開始しておらず、英米の海軍は全勢力を極東に注ぐことが可能であり、加盟することに利点が見られなかったからである。しかし、戦争が勃発し、フランスが陥落すると状況は一変した。英国が多くの艦隊を極東に送ることは不可能になり、アメリカ海軍は大西洋での危険に懸念し始めざるを得なかった。この状況になったことで、海軍は完全に喜んで同盟を支持し、最終的に三国同盟が締結された。

既に述べたとおり、日本が戦争と枢軸国に加わったのはナチスからの圧力があったからだとする一般的な考えはあまりにも甘すぎる。日本はナチスから脅威を受けておらず、極東は彼らからは十分に離れており、彼らを恐れる直接的な理由はなかった。もし日本がナチスについて不安を感じるとすれば、それは彼らが民主主義諸国を圧倒し、極東で彼らと戦うことになる可能性がある時だ。この場合、日本にとっては、枢軸国に加わって民主主義諸国を転覆し、ナチスを増強するよりは、民主主義諸国に加わってナチスを撲滅するほうが理にかなっていただろう。日本のバイブル（臣民の道）を読めば分かるように、事実上、日本はナチスも、民主主義諸国もそれ以外のいかなる国も必要としなかった。彼らの使命はこの世界に神聖な秩序を設立し、全ての国々と全ての信条はこの秩序のために、喜んで差し出すか、あるいは壊滅して降伏するしかなかった。それは、朝鮮、満州、中国の一部、インドシナや他

の占領地域のように。日本が枢軸国に加わった理由は極めて簡単である。それは唯一の世界共栄圏を達成するまでの征服計画の第一段階として、アジア征服を促進するためである。枢軸国との同盟は、日本が極東の主導権を握るために英米国に勝利するという当面の課題から考えられる日本にできる最も理にかなった選択肢だった。

松岡がベルリンに行ったのは、ヒトラーが単に彼に来ることを要請していたためではない。ヒトラーは彼にベルリンに来てもらい、ナチス党の党首がソ連に攻撃を開始する前に、民主主義諸国への戦争に日本も参加することを要請するためだった。日本と共に戦争をすることで、ドイツが最も脆弱化する時期、すなわち、ソビエトと戦っているときに、民主主義諸国のナチスへの圧力が弱められることになるだろう。日本の軍国主義者は松岡にベルリンに行ってもらい、ヒトラーがいつ動くかを探り、日本の南太平洋領域の民主主義諸国を攻撃するために最善な時期を知りたかった。ヒトラーは松岡に満足な回答を示すことが出来なかったが、英国諸島への侵攻とスエズ運河の獲得が最終的に実行されると述べた。彼はまた、松岡にソビエト攻撃の計画を告げることもできなかった。この日本外務大臣はナチスの英国への攻撃は「最終的に」行われると想定して、スターリンと条約を締結した。この準備として、彼はソ連と条約を結ぶことは日本にとって有益かもしれないと考えていた。

ナチスの同盟国の状況が最も暗く、東京でのドイツ人の影響力が最低になった時期に日本が南方を攻撃したという事実が、日本がナチスと結んだのはナチスが戦争に勝利すると考え、戦争に加わったのはナチスから「強制」されたからとの弁明をほぼ完全に反証している。1941年9月26日の三国同盟の1周年の前夜に、枢軸国特派員委員会の晩餐会が開催された。私が同盟ビルからイタリアのニュース通信社であるステファニーの特派員で、名前はゲターノ・オーリシオと一緒に出てきた。彼は晩餐会に出席するところだった。私と別れる前に、彼は、日本は怖気づいて民主主義諸国を攻撃することはないだろう、そして、「来年はあなたたち（つまりアメリカ人）が晩餐会に呼ばれるだろう」と厭世的な考えを口にした。これは、私が日本を去るまで、そして、恐らく、真珠湾攻撃まで、東京にいるドイツ人とイタリア人の多くが感じていたものだった。それからそれほど経たずに、同じ名前のオーリシオが平沼男爵暗殺未遂事件に関与した疑いで警察に逮捕された。平沼男爵は閣僚の主導的メンバーで、元々は枢軸国との同盟を反対したが、その理由は、海軍と同じように、原則的に反対したのではなく、期が熟していなかったからだった。

日本の警察はドイツ人とイタリア人の行動をアメリカ人とイギリス人と同じように、厳しく監視していた。日本人の同盟国外国人への管理は、アメリカ人の敵国外国人への管理よりも良好であったとあって恐らく間違いない。東京でのナチスの影響力は過大評価されてきた。ナチスは1941年1月に日本に戦争に加わるよう説得したが、日本は抵抗し、当時のドイツ人と協力することはなかった。実際、日本人とドイツ人は現在も協力していない。日本人とドイツ人は当面の間、世界の舞台で、それぞれの計画を実行しているのに過ぎない。彼らの計画の効果がたまたま直接的に民主主義諸国に向けられているという事で、間接的な形で

互いを援助し、日本とナチスが持っている唯一の共通の利益になっているのである。しかし、彼らが勝利を収めることになれば、最終戦で、どちらの「八紘一宇」が君臨するかを決めるために両者が対面しなければならないことに気付くことになる。

軍国主義者は日本の国民に対してと同様、米国に対しても平和的に服従するのではなく、米国を攻撃することを決めたことで、彼らは間違いなく、アメリカ国民が内部分裂し、「衰退」することを強く期待した。しばらくの間、日本の報道は米国内での様々な地域間での対立を面白がって暴露した。ヨーロッパ戦争勃発後は、繰り返し、工場でのストライキと国会と国家全体の不和を指摘した。リンドバーグ、ウィーラーと他のアメリカの孤立主義者は日本の新聞では英雄とされ、ほとんどが一面に掲載された。日本は、大統領に反対する孤立主義者を励まそうと公式声明を発表したが、さらに、米国でのプロパガンダの書物と工作員を通じて、全力で、アメリカ国民の分断を促した。

日本のナショナリストたちが、アメリカ人は「穏やか」になっていると信じて、それを直接私に語った。戦争の苦しさには日本人は慣れているが、アメリカ人はこの苦しさを癒すために、アメリカ産の自動車、家具が整った住居、美味しい食事、映画などを好んでいると言った。彼らはアメリカン・マインドは、第一次世界大戦以降、米国の近視眼的な政策から分かるように、「穏やか」になっていると思い込んでいた。しかし、彼らは、アメリカン・マインドは永久的に停止していると信じ込むという重大な間違いに陥ってしまっていたのかもしれない。アメリカの新世代は過去の大失敗を繰り返し続けているわけではないかもしれないことを、両側から共に同じくらい大志を持って世界を支配することを目指す二つの国が戦いに火を注いだことで、昔のアメリカ国会議員たちよりも、莫大な機密情報を持っている新しいアメリカが生まれているかもしれないことを、そして、ジム・チューのように、多くの国民が見ていないうちに国家が直面している危険を目撃し、多くの人々よりも早く命を捧げようとするアメリカ人がたくさんいることを、彼らは見落としていたのかもしれない。

アメリカの歴史上最大の戦争に向かって、勝利のためにアメリカ人は戦争を引き起こした国の武力について知ることの必要性が分かるだろう。日本に関して言えば、アメリカ人がこれほど知らなかった国との戦争に関与したのはかつてなかったと言っていいだろう。多くのアメリカ人は、今でも、日本と戦っているのは彼らが真珠湾を攻撃したからだと考えているようだ。もしアメリカ国民が真珠湾のことだけに動揺しているのであれば、その後、日本が再度攻撃を行うまでは、アメリカ政府は戦争を中止し、真珠湾基地に撤退することになれば、日本政府は基地の損害を全て修復し、沈没した艦船を全て交換し、そこで失われた全ての命に補償を支払うことを喜んで行うだろうと考えても、それほど危険ではないだろう。

真珠湾攻撃で戦争が開始したかもしれないが、それが日本軍国主義者の征服計画の開始だったわけではない。真珠湾は征服計画の一過程に過ぎず、1941年12月7日に攻撃された理由は、日本は我々が真珠湾で待機することを拒否し、その代わりに、中国などの他の人々に

アメリカ支援の資格を与え、彼らも自由になり、この自由であることによって彼らの国が安全になることで、日本が、日本の世界の八隅への到達計画で、これらを破壊する時に対して防御するために配置された基地と同様、間接的にアメリカ人を助けることになっていると感じたからである。

日本人が彼らの戦争を行っている間に、アメリカ人は太平洋戦争を引き起こした軍隊を撲滅する必要性を、先人よりも正しく理解しない限り、再び無駄で終わることに気付くことになるだろう。現人神の天皇、狂信的な軍国主義者、そして、同じように危険で、兵器を提供し、神聖の使命である征服に従事している財閥からなる邪悪な三位一体によって日本が支配されている限り、太平洋に真の平和を見出すのは難しい。日本人が軍国独裁政権の愛国的な犠牲者となる大きな原因である、

封建思想、充満した神話と靈魂と亡くなった先祖の魂の牢獄によって、多くの日本人は軍国独裁政権の愛国的犠牲者になったが、日本人はこの牢獄から解放されない限り、アメリカ人の殆どが喜んで住んでいる、自由民主主義制度を日本人が、考え、或いは得ることは難しい。そして、日本人は、まず、牢獄の鍵を持っている天皇によって解放されない限り、知性と靈的な牢獄から出ることは出来ない。天皇自身は悪くはなかったのかもしれないが、無力でありながら、見事に三種の神器を継承したことで、天皇自身をも被害者にした軍閥から制御された人民の熱烈な帝王を確保した支配者となり、これに対して人民が盲目的かつ卑屈に服従するという原則には重大な問題がある。

神道宗教で日本人のうちから唯一無二とした者を神として高揚し、彼の神聖について疑問を発することが犯罪と見なされることになった。この神道宗教の束縛から一旦解放されれば、日本人は軍国主義の独裁政権下であって、民主主義諸国に対して死闘するよう導かれていることに初めて気づくことになるかもしれない。一旦、今の軍国主義者を調べ、一旦、神や天皇に対する不敬罪として告訴することなく、軍国主義者に対して自由に意見を述べるようになれば、現状の彼らが軍国主義者から支配されているのではなく、彼らが軍国主義者を支配することが出来るようになるだろう。

日本人が、神道の大祭司（**天皇）の軍事守護者によって襲われることなく、人間として自由に考える精神を取り戻し、自由な考えと自由な行動を取り戻すことが出来れば、一握りの財閥からなっている経済的独裁権力から解放されるかもしれない。日本人はこれまで経済的独裁権力を管理することはできず、経済的独裁権力は現人神と軍国主義者の統治者と同じように、日本人を犠牲にしてきた。

従って、アメリカが戦っているのは、アメリカの多くの漫画家がサルとして描いて自己欺瞞で喜んでいるかもしれない、奇妙な背の低い不快な生き物ではない。彼らが戦っているのは

非常に勤勉で繊細な感性を持つ民族である。しかし、何れも、日本の邪悪な三位一体で構成されている支配者によって歪められ、最終的に征服のために変えられたのである。この三位一体が破壊されるまでは、民主主義諸国はこの日本を捨て去ることはできないだろう。そして、この三位一体が破壊されるまでは、日本国民は封建思想の世界から頭を上げて、死ぬのではなく、他国と協力して、生を追求することができないだろう。